観光地誌学のすすめ

An Exhortation toward Regional Geography of Tourism

菊地　俊夫 *
Toshio Kikuchi

摘　要

観光地誌学を学ぶことで，身近な地域の生活や文化，あるいは世界の異なる生活や文化を総合的に理解できるようになる。そして，総合的に地域や世界の様相を理解することは，さまざまな視点に立った見方や考え方を身につけることにもなる。このように，地域や世界をさまざまな視点から見たり考えたりすることは，複雑化した現代社会において，地域や世界のさまざまな課題を解決するための方法を見出すことに役立つ。現代社会においては，「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」として国際社会共通の目標が17 ある。それら１つ１つの目標に関する課題の発見と解決に観光地誌学の見方・考え方は間違いなく役立つ。

Ⅰ．はじめに

地域を研究する地理学において，土地や場所の特徴を読み解く方法は大きく２つある。１つは，土地や場所で興味・関心のある「現象」や「事象」を取りあげ，その現象の秩序や法則性，あるいはその現象の因果関係や形成システムなどを通じて土地や場所の特徴を理解する方法である。これは，地形や気候，あるいは人口や農業など１つの特定なテーマを切り口にして，それに関する事象や現象を掘り下げて「地（ち）」の「理（ことわり）」を「学（まな）」ぶものであり，系統地理学的な方法として知られている。もう１つの方法は，特定の現象・事象やテーマに興味をもつのでなく，空間を区画した土地や場所としての「地域」に興味をもつもので，地域を構成する自然や文化，および社会や経済などの諸要素を丁寧に記載し，それらの記載を総合的に検討して地域の性格を読み解くものである。これは，「地（ち）」を「誌（しる）」すことで土地や場所の性格を明らかにするもので，地域地理学や地誌学の方法として周知されている。

このような地誌学の方法は地理学の王道であり，系統地理学とともに地域を理解するための両輪の１つであることは間違いない。さらに，地誌学には大きく 3 つの方法がある。第 1 は，地理的な位置や自然，歴史・文化，人口，産業・経済，社会などの項目にしたがって，地域の様相を丹念に記録する方法で，静態地誌と呼ばれるものである。静態地誌は項目にしたがって丹念に記録するため，地域を網羅的に記載することができ，地域を知る資料として，あるいは地域に残すべき資料として重要な役割を果たしている。しかし，静態地誌の方法は，総花的であり，個々の項目が並列的に扱われるため，地域の特徴を見出しにくくし，地域を構成する諸要素（自然や歴史・文化，および社会や産業・経済など）の関連性の理解も難しくなっている。

静態地誌の本質的な欠点を解決するために考案されたのが，第 2 の方法となる動態地誌である。動態地誌は，地域において特徴的な現象や事象（あるいは，興味ある現象や事象）に焦点を当て，その現象・事象に基づいて地域を構成する諸要素を記載説明するものである。例えば，オーストラリアを動態地誌として扱う場合，興味ある現象として観光を選択すると，観光資源としてのオーストラリアの自然やアボリジニ文化，観光市場としてのオーストラリアの人口分布，オーストラリアの産業経済における観光産業の位置づけ，そして観光による世界各国との結びつきなどが説明され，それら観光との関わりを通じてオーストラリアの性格が議論される。このように，動態地誌は特定の現象を抽出して，それと関連づけて地域の構成要素を体系的に説明することができるという長所がある。しかし，動態地誌は地域を構成する要素を網羅的に説明することができないという短所をもっている。観光地誌学は「観光」や「ツーリズム」を切り口にして，それらと関連する要素に焦点を当てて地域を描くものであり，動態地誌の１つとして考えることができる。

地誌の方法として，静態地誌を選ぶのか，動態地誌を選ぶのかは，どのような地域スケールで，地域の何を記載するのかにもよる。例えば，州・大陸規模のマ

*東京都立大学都市環境学部観光科学科
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1（9 号館）
e-mail　kikuchan@tmu.ac.jp

クロスケール（ヨーロッパやオーストラリアなどのスケール）で地域の様相を記載する場合，さまざまな項目に基づいて地域の構成要素を網羅的に記録する静態地誌の方法が適しているかもしれない。それは，静態地誌が地域を大観できるためであり，地域のさまざまな情報を資料として把握できるためである。他方，市町村規模や集落規模のミクロスケールの場合，地域の網羅的な情報も重要であるが，地域の特徴的な要素が他の要素とどのように関連して存在しているかが伝えるべき重要な情報になる。ミクロスケールで地域のさまざまな情報や要素を網羅的に議論することは，対象となる地域の特徴を分かりづらいものにしてしまう。そのため，ミクロスケールでは地域の構成要素の相互関連性を議論する動態地誌が地域の性格を理解するのに適しているかもしれない。また，国や地方のようなメソスケール(イギリスや日本などのスケール)では，何を地域の情報として伝えるかによって，静態地誌ないしは動態地誌が選択される。

地誌学のもう1つの方法は，比較地誌である。比較地誌は2つの地域を取り上げ，それらの地域を構成する要素や要素間の相互関係における類似性や対照性の視点から考察を加え，それぞれの地域の性格を明らかにする方法である。地域を比較する枠組みは静態地誌であっても，動態地誌であっても構わない。重要なことは2つの地域を項目やそれらの広がり（空間スケール）など同じ尺度で比較することである。特に，比較する地域の空間スケールは重要である。州・大陸規模での地域比較であれば，ヨーロッパやオセアニア，あるいはオーストラリア大陸という空間スケールでの比較が望ましく，ヨーロッパとニュージーランド（国のスケール）の地域比較は望ましいものではない。

Ⅱ．観光地誌学の方法

観光によって変化する地域を，あるいは観光現象が多く分布する地域を読み解く方法の1つとして観光地誌学があり，その基礎となる手法は伝統的な手法として知られている静態地誌である。静態地誌は，地域における特定の現象や事象に興味をもつのではなく，区画した土地空間としての地域に興味をもつもので，地域を構成する自然や文化，および社会や経済などの諸要素を丁寧に記載し，それらの記載を総合的に検討して地域の性格を読み解くものである。地域を記載し地域の性格を総合的に把握するためには，地域を構成する諸要素を位置（数理位置・関係位置），自然（地形・気候・陸水・土壌・植生），人口（人口属性・人口構成・人口分布・人口移動），歴史，産業（農牧業・工業・商業・流通・交通・通信・観光），生活文化（都市・村落・衣食住），他地域との関連に分け，その順序と項目に従って体系的･網羅的に整理する方法が一般的である(図1)。以上に述べた項目ごとに地域を調べて考察する方法は，多くの国別の世界地誌や百科事典で採用されている。このような方法は，地域を構成する要素を項目として漏れなく網羅的に調べることができ，地域が異なっても同じ項目で体系的に調べることができるため，地域の比較も容易にできる。しかし，地域を構成する要素が羅列的に説明されることや，地域を構成する要素間の相互関係に基づく性格や特徴が把握しにくいといった問題も指摘されている。

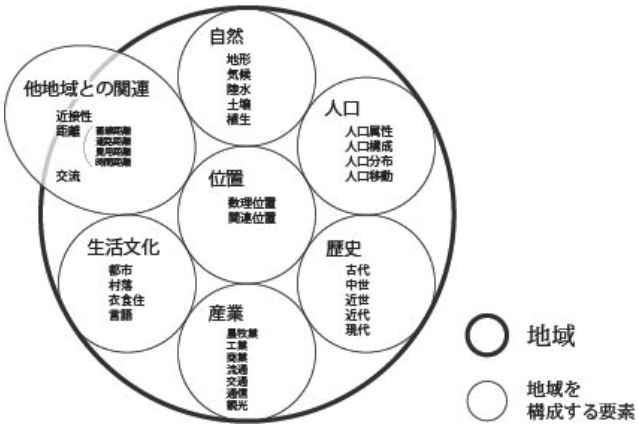

図1　地域と地域を構成する諸要素

地域を構成する要素を項目ごとに記載して地域の性格を明らかにする静態地誌の方法に代わって，特色ある地理的事象や地域の構成要素を中心にして，他の構成要素と関連づけながら地域の性格を考察する方法が求められてきた。この新しい方法が動態地誌と呼ばれるもので，そこには観光地誌学も含まれる。動態地誌は従来の静態地誌の問題点であった総花的で羅列的な記載，あるいは分析的でない考察やステレオタイプ的な説明を改善するためのフレームワークが提供されている。このフレームワークの基本は記載した要素を分析し，それぞれの相互関連性に基づいて地域の性格を体系化することにある。観光地域のように特定の現象（観光）に基づく地域の分析や理解には，動態地誌のフレームワークが適している。動態地誌のように，地域を構成する要素の相互関連性に基づく整理・記載の方法では，地域構造図をつくることが重要になる。地域構造図は地域を構成する諸因子や諸要素の相互関係を示している（千葉 1972；1973)。地域構造図を作成

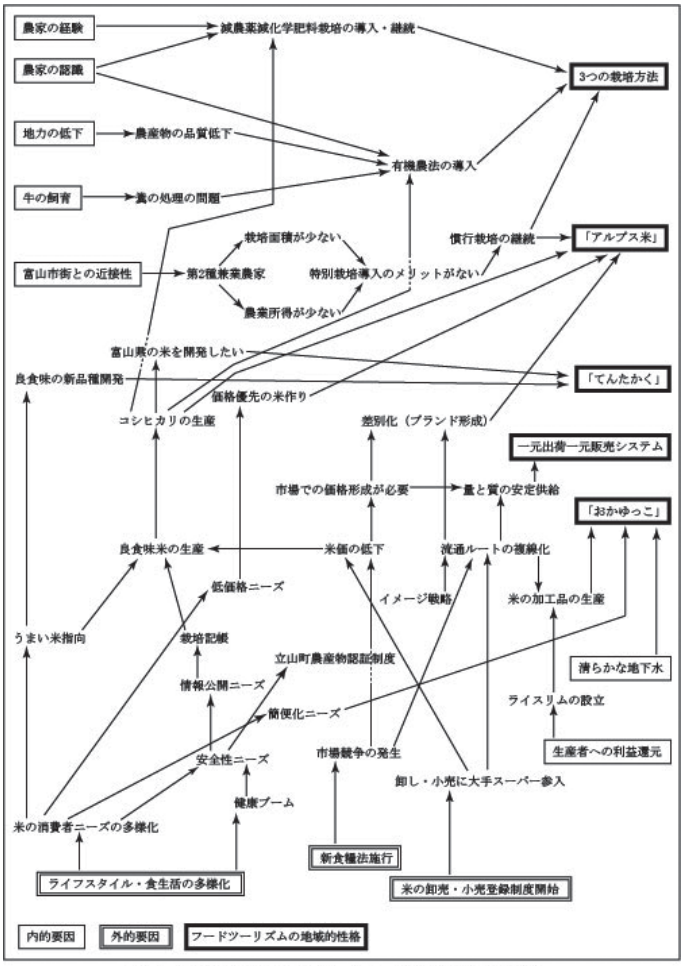

図２　富山県立山町におけるフードツーリズム発展の地域構造図　（現地調査により作成）

するためには，対象となる地域の地理的事象のなかで特徴的なものや関心のあるものに焦点をしぼり，それに関連した因子や要素を抽出し，それらの相互関係を明らかにすることが必要になる。実際，地域構造図では抽出した因子と要素の関連性や関係順序（序列や階層性）に従って系統的に矢印で結ぶことにより，地域構造図の概念的なフレームワークが構築できる。さらに，関連性の強さを矢印の太さで示したり，関係順序を歴史的系列や社会経済的系列，および自然的系列に区分して記述したりするなど，地域構造図をわかりやすくする工夫も必要になる。

地域構造図の１つの事例として，富山県立山町におけるフードツーリズムに着目した地域の因子と要素の関連性を図２に示した。立山町のフードツーリズムの発展とその地域的性格は５つの要素で特徴づけられている，すなわち，それらは３つの稲栽培法の普及，「アルプス米」のブランド化，「てんたかく」品種の導入，一元出荷一元販売システムの定着，および米の加工品としての「おかゆっこ」の生産の５つである。具体的には，地域の内的因子（農家の経験，農家の認識，地力の低下，牛の飼育，富山市街との近接性，清らかな地下水，生産屋への利益還元）が外的因子（ライフスタイル・食生活の多様化，新食糧法施行，米の卸売・小売登録制度開始）と関連して順次，地域の構成要素を生みだし，最終的にはフードツーリズムの発展はそれを特徴づける５つの要素に収斂されていく。以上に述べたように，富山県立山町の性格はフードツーリズムの発展，あるいは稲作農村の変化という地理的事象に焦点をあて，それに関連して自然や社会経済，および歴史的背景や生活文化，他地域との関係を関連づけることにより，地域の性格は動態地誌として体系的に説明され明らかになる。動態地誌学の方法は，地域を総合的に見たり考えたり理解したりするため，ジェネラリストの養成に貢献することになる。そのため，観光地域の分析においても，地誌学的なフレームワークは地域理解の基礎になる。

Ⅲ．観光地域を地誌的に理解するための景観分析

観光地域を地誌学的に理解する１つの考え方や方法として景観分析がある。景観分析のフレームワークに

よれば（図３），景観は地域の諸環境（自然，歴史・文化，社会・経済，生活など）を地表上に投影したものとして捉えることができる。そのため，景観を読み解くことにより，地域の構成要素としての諸環境を少なからず地誌学的に理解することができる。地域や場所の単なる景観，あるいはそこでの人びとの日々の生活を写した景観を体系的に読み解くためには，最初に景観のなかに特徴的な現象や興味深い現象を発見し，次に発見した現象を特徴づける自然環境，社会・経済環境，歴史・文化環境などを抽出し，最終的に特徴的な現象と諸環境との相互関係から地域の性格を考えなければならない。それは，動態地誌の考え方と同じである。基本的には，景観は地域の自然環境や社会・経済環境，および歴史・文化環境などを基盤にし，それらの環境要素がジグゾーパズルのようにモザイク状に，あるいは重層的に組み合わされてつくられている。そのため，ジグゾーパズルのピースを１つ１つはがしていくように，景観をつくる環境要素を識別し，それらと人間との関係を明らかにすることは地域を理解するひとつの醍醐味となる。

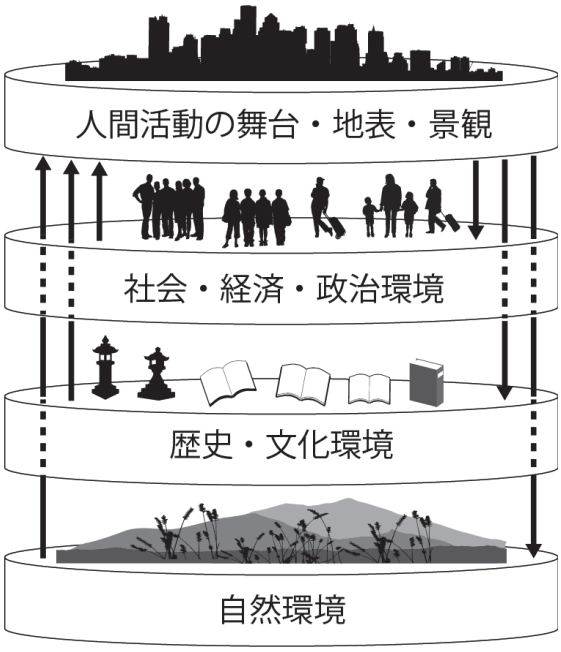

図３　地域における景観分析のフレームワーク

実際にカナダ・ブリティッシュコロンビア州のオカナガンバレーの観光地域の景観を実際に読み解いてみよう（写真1）。自然環境はロッキー山脈東麓の細長い湖（オカナガン湖）で特徴づけられ，その形態は氷河湖の様相を呈している。氷河湖の周辺は盆地状の地形になっており，森林がみられないことから，この地域は雨が少なく，日照時間の長い温暖な気候であることがわかる。このような自然環境を利用して果樹農業が伝統的に発達した。当初，リンゴ栽培が発達したが，アメリカ合衆国との自由貿易協定によりリンゴ市場が開放され，アメリカ産の低廉なリンゴが流入することにより，リンゴ栽培は衰退した。リンゴ栽培に代わる新たな商品生産として醸造用のブドウ栽培が導入され，オカナガン湖周辺で多く栽培されるようになった。醸造用ブドウ栽培の発達とともに，ワイン生産も本格化し，ワイナリーとブドウ畑を，あるいはワイナリーとワイナリーをワイン街道で結ぶようにしてワインツーリズムが発展している。さらに，日照時間の長い温暖な気候はリタイヤした人びとやシニアの人びとのリゾート的な居住地としても人気があり，カナダ・ブリティシュコロンビア州の一大観光地の地位を確かなものにしている。このように，私たちは地表上に投影された観光地域の景観を地誌学的に自然環境や歴史・文化環境，および社会・経済・政治環境と関連づけて読み解くことにより，観光地域としての景観分析を行うことができる。

写真１　カナダ・ブリティシュコロンビア州のオカナガンバレーの景観
（2008 年 9 月筆者撮影）

以上に述べてきたように，景観を読み解くことは，何気ない平凡な身の回りの景観にもさまざまな意味を見出すことでもある。しかし，景観にさまざまな意味を見出すことは容易ではない。景観を読み解く手順にしたがって，自然環境や歴史・文化環境，および社会・経済・政治環境から検討しても，地域の興味深い特徴は見出せないかもしれない。それは，自分の知識や見聞・体験以上に地域の特徴を読み解くことができないからである。景観を読み解くためには，専門的な知識が必要であるが，幅広い知識や見識や体験も必要になる。いわば，スペシャリストの素養よりも，ジェネラリストの素養が求められる。森を理解しようとする場合，個々の「木」だけを観るのではなく，「森」全体を

観る姿勢が観光地誌学には肝要となる。

Ⅳ．観光地理学と観光地誌学の違い

これまで述べてきたように，観光やツーリズムに関わる地理学の研究は大別すると２つの方向性がある。１つは観光やツーリズムを切り口に系統地理学のアプローチを用いて地域を分析するもので，観光地理学と呼ばれる研究領域である。観光地理学は地域における観光やツーリズムそのものを分析し，観光やツーリズムが地域にどのような影響を及ぼし，地域がどのように影響したのか，あるいは観光やツーリズムが地域の発展にどのような役割を担ってきたのかを明らかにしてきた。このような観光地理学の従来の研究成果は多く，地域の発展・振興や活性化における観光やツーリズムの役割を時間的，空間的に明らかにしてきた（菊地 2018）。しかし，地域にとって何が観光やツーリズムの資源として機能するのか，あるいは地域が観光やツーリズムを用いて発展できる能力をもっているかどうかなどの地域の本質的な疑問に観光地理学が答えることは容易ではなかった。それは，観光地理学が観光やツーリズムといったテーマを掘り下げることを得意としているためであった。

観光やツーリズムに関わる地理学のもう１つの方向性が本書で学んできた観光地誌学の研究領域である。観光地誌学は地域地理学や地誌学のアプローチに基づき，観光やツーリズムを核としてそれらに関連する自然環境や歴史・文化環境や社会・経済環境などの地域環境を関連性に着目しながら記載していくことが重要な方法となっている。つまり，観光地誌学の主要な目的は，観光やツーリズムを介して地域の様相を描き記録することにある。そのため，観光地誌学の研究成果の多くは，観光やツーリズムに関連した地域資源の発見や再発見であり，見直しでもある。地域資源は自然環境や歴史・文化環境，あるいは社会・経済環境など多岐にわたり，それらから有用な地域資源を見出す作業が観光地誌学で地域を描くことと同調している。多分，１つの地域資源が観光やツーリズムのキラーコンテンツとなる場合は稀であり，多くの場合は観光やツーリズムにとって取るに足らない地域資源である。しかし，そのような地域資源が組み合わされことにより，強力な観光資源のまとまりに変身することも少なくない。観光やツーリズムに有効な地域資源の組み合わせを考え描くことも観光地誌学の研究の成果の１つになる。

観光地理学と観光地誌学を比較してまとめたものを表１に示した。それによれば，観光地理学と観光地誌学は同じ地理学の分野であるにもかかわらず対象や方法，および地域の見方・考え方や研究内容が異なることがわかる。研究対象は系統地理学と地域地理学の違いを反映して，観光地理学は「テーマ」であり，観光地誌学は「地域」である。観光地理学が取り上げるテーマはルーラルツーリズムやアーバンツーリズム，あるいは自然ツーリズム（エコツーリズムやジオツーリズムなど）や文化ツーリズムであり，それらのテーマを通じて地域を「深く」みることが観光地理学の主要な姿勢である。そのため，観光地理学の方法は分析的であり，演繹的である。そのような方法によって分析することは単眼的であるが，専門的であり，スペシャリスト的な見方･考え方を引き出すことに適している。

他方，観光地誌学が取り上げるのは地域であり，観光地誌学ではどのようなスケールで地域を取り上げるのかが重要になる。例えば，州大陸規模のマクロスケール（グローバルスケール）で取り上げるのか，国や地方（関東地方やプロバンス地方）などのメソスケールで取り上げるのか，あるいは県や市町村などのミクロスケールで取り上げるのかによって，観光地誌学の記載の仕方は異なるかもしれない。しかし，観光地誌学の対象となる地域スケールが変わったとしても，その方法が地域を「広く」見ることに変わらない。つまり，観光地誌学の地域の見方は複眼的であり，ジェネラリスト的である。そのため，観光地誌学の基本的な方法は記載的であり，帰納的なものになっている。

表1　観光地理学と観光地誌の比較

	研究対象	地域の見方･考え方	方法	研究のアウトプット
観光地理学	テーマ	地域を深くみる スペシャリスト的 単眼的	分析的 演繹的	地域の変化 地域への影響 地域の発展･振興･活性化の要因
観光地誌学	地域	地域を広くみる ジェネラリスト的 複眼的	記載的 帰納的	地域資源の見直しと活用 地域資源の組み合わせ 地域資源の存在形態･役割･機能

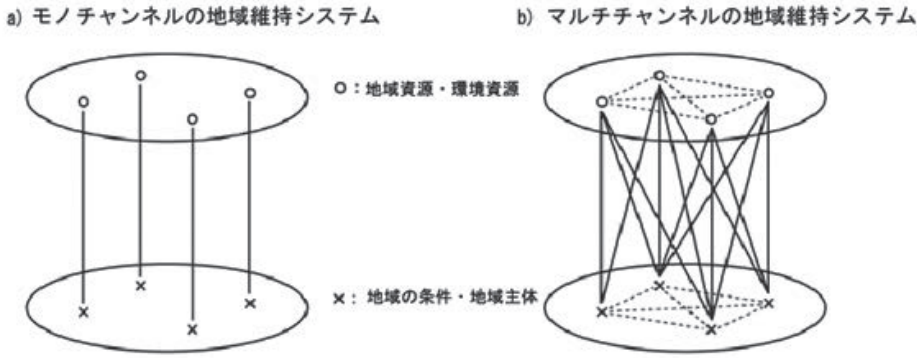

図４　地域資源・環境資源の利用とそれに基づく地域維持のモデル的状況

観光地理学と観光地誌学の違いは，それぞれの研究の課題や内容をアウトプットから比較することで，より明確なものとなる。表１によれば，観光地理学の主要なアウトプットは観光の導入・発展にともなう，地域変容のプロセスやメカニズムの解明であり，観光の地域への影響を明らかにすることでもある。それに対して，観光地誌学は地域の環境資源（自然や歴史文化，生活や産業などの資源）がどのように活用されて観光やツーリズムと結びつくのかをテーマとしており，そこには地域資源の見直しや新たな発見も含まれる。そして，地域の環境資源をどのように組み合わせることにより，観光やツーリズムが発展するかも観光地誌学の主要なテーマである。

例えば，ルーラルツーリズムから群馬県川場村の性格を観光地誌学の方法で描くと，川場村には地域資源としての自然（森林，温泉，山岳，景観など）や社会経済（農林業，スキー場，高齢者の知恵や技など），および歴史文化（昔話や昔遊び，郷土食，生活文化など）が多く存在するが，それらは１つ１つでは強力な観光資源にならない。川場村では多種多様な地域資源を有機的に複数組み合わせることで強力な観光資源が構築されており，それが地域の特徴となっている。また，図４に模式図的にまとめたように，川場村では個々の利用主体それぞれが１つ１つの地域資源と結びついているというよりも（モノチャンネル型），複数の地域資源と結びついている（マルチチャンネル型）。

このような主体と地域資源の結びつきは，１つの地域資源が機能しなくなったとしても，他の地域資源が補完的に機能するという仕組みとなり，内発的で持続的なルーラルツーリズムを生み出すことになる。さらに，地域資源が有機的に結びつくだけでなく，ルーラルツーリズムに関わる主体（農家，高齢者，若者，行政，農産加工組合，観光客など）も相互に関連し合うことにより，ルーラルツーリズムの持続性はさらに強いものとなっている。このようなルーラルツーリズムの持続性の強化は農村資源や地域資源の共有化と共同利用化に反映されている。具体的には，森林オーナー制度やレンタアップル制度，および棚田オーナー制度は都市住民のオーナーによって農村の景観や生産活動，および生活文化を守ろうとするもので，都市住民と地元農家が農村資源を共有化・共同利用化した典型である。

以上に述べたように，観光地誌学は観光やツーリズムを介して地域資源を有機的，総合的に描くことになり，それは地域資源の見直しや新たな発見，および地域資源の組み合わせによる効果を見出すヒントを与えることになる。

Ⅴ．観光地誌学の展開と一般化

一般的には観光を大別すると２つの意味がある。１つは発地型観光であり，もう１つは着地型観光である。発地型観光はパック旅行で代表されるように，出発地において料金がすべて支払われ，最初に観光エイジェントのコーディネーターが決めたコースを順番に回遊するもので，観光地に落ちる金銭は少ないし，地域の主体がコースに関わる余地はほとんどない。他方，着地型観光は観光者が目的地に着いてから，訪問先やコースを決定するもので，地元住民などの主体が地域を楽しんでもらう工夫や金銭を地域に落としてもらう工夫をしなければならない。したがって，着地型観光を発展させるためには，あるいは地域資源に基づく観光をつくるためには地域を学び，地域資源を掘り起こし，その保全と適正利用を考えなければならない。地域や地域資源に関する調査や研究の方法として観光地誌学の方法や見方・考え方は有効であり，それらは地域に適応した観光を成立・発展させる近道の１つである。

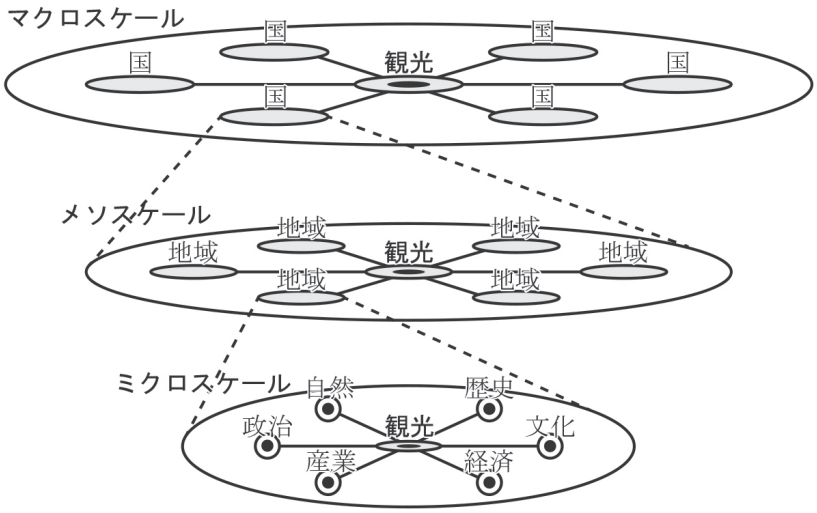

図５　観光地誌学における地域スケールの階層モデル

当然のことながら，観光の醍醐味は地域資源を掘り起こし，それらの地域資源をどのように保全しながら活用するのか，そしてそれらをいかにして自然や生活文化や社会経済と関連づけて持続的な地域振興に結びつけるのかである。地域資源を活用するだけでなく，地域振興に結びつけるためには，地域資源の適正な保全と活用を知り，地域資源に基づく着地型観光の可能性を高める担い手づくりが重要になる。そのような担い手づくりにも地域を総合的に理解することができる観光地誌学の見方・考え方が役に立つ。

観光地誌学の大きなセールスポイントは地域資源の有機的，体系的な組み合わせを明らかにできる点である。しかし，このセールスポイントは強みと弱みを兼ね備えたもろ刃の剣でもある。地域資源の組み合わせを明らかにすることは伝統的な地誌学の欠点でもあった記載的な方法を改善するもので，分析的で科学的な見方・考え方をもつものとなっている。それは，動態地誌の利点を生かしたものでもあった。しかし，地誌学の宿命的な課題として一般化の問題は残されたままであった。つまり，観光地誌学もどのように地域を描こうと，それは当該地域の話であり，1 つの地域事例の話で終わってしまう。本書も観光地誌学の地域事例の話で終わってしまっている。しかし，系統地理学で行われているように，明らかになった現象や事象の一般化が地誌学でも求められる。特に，動態地誌や観光地誌学は特定のテーマを切り口にして地域の性格を明らかにするため，明らかになった事象や現象の一般化が必要になる。

観光地誌学の知見を一般化するフレームワークとして，本書は地域スケールの階層性を考慮した図５のモデルを提案する。地誌学の見方・考え方の大きな特徴は対象とする空間スケールが変えられることである。つまり，空間スケールは県・市町村レベルや集落レベルのミクロスケールから地方や国レベルのメソスケール，そして州や大陸規模のマクロスケールまで変化し，それぞれのレベルに応じて地域が描かれる。このような空間スケールの階層性を援用して，観光地誌学の一般化を試みたものが図５のモデルである。それによれば，ミクロスケールの観光地誌学では，地域のさまざまな地域資源が観光を中心に有機的に組み合わされて，1 つのまとまりあるシステムが構築される。市町村レベルのさまざまな観光地誌学のシステムが地方や国レベルのスケールのなかで分布し，それらの市町村レベルのシステムも地方や国レベルのスケールのなかで観光を中心にして１つの観光地誌学のシステムを有機的に構築していく。同様に，地方や国レベルの観光地誌学のシステムは州や大陸レベルのスケールのなかで観光を中心として１つのシステムにまとめられていく。このようにして，観光を中心とした階層的な空間システムが明らかになる。

実際，オーストラリアの観光地をオーストラリア人と外国人観光客の訪問の多い場所を上位 20 位で比較すると（図６），オーストラリア人観光の訪問地は大陸東南海岸に集中しており，またハンターバレーやグレートオーシャンロードなどの主要都市に近接した観光地も多く利用されていることがわかる。それに対して，外国人観光客の訪問地は主要都市とともに，ウルルやカカドゥ，グレートバリアリーフなどの自然資源を主体とする国立公園に集中している。このようなオーストラリア人と外国人観光客の訪問地の違いは，それぞれの観光資源に対するまなざしの違いが反映された結果といえる。オーストラリア人のまなざしは都市やそ

図６　オーストラリアにおける国内観光客と外国人観光客の人気観光地トップ 20（2007 年）
（Australian Bureau of Statistics により作成）

の近郊の身近な余暇・レクリエーション空間や国立公園に向けられる傾向があり，そのような観光資源を組み合わせた場所が観光地として人気がある。一方，外国人観光客のまなざしはオーストラリアのヨーロッパ的な都市景観と豊かな自然資源に向けら，そのような組み合わせの場所が観光地になっている。つまり，それぞれの場所に応じた環境資源の組み合わせによって，さまざまなタイプの観光地がつくられている。そして，多種多様な観光地は人びとのまなざしや好みによりオーストラリア国内に分布している。これらの観光地はそれぞれの特徴を生かしながら，さまざまな観光客のニーズにこたえるように補完し合い連携し合うようなシステムを構築している。このことは観光地誌学を空間的な階層システムに基づいて一般化する１つの証左になる。

Ⅵ. 観光地誌学の社会への貢献

観光地誌学を学ぶことで，身近な地域の生活や文化，あるいは世界の異なる生活や文化を総合的に理解できるようになる。そして，総合的に地域や世界の様相を理解することは，さまざまな視点に立った見方や考え方を身につけることにもなる。このように，地域や世界をさまざまな視点から見たり考えたりすることは，複雑化した現代社会において，地域や世界のさまざまな課題を解決するための方法を見出すことに役立つ。現代社会においては，「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」として国際社会共通の目標が 17 ある。それら１つ１つの目標に関する課題の発見と解決に観光地誌学の見方･考え方は間違いなく役立つ。特に，以下の５つのことに役立つといえる。

１）現代世界における他地域の様相や性格を正しく認識し理解すること。

２）地域や社会における資源の偏りや価値観の差異を理解し，公平な地域や社会をつくること。

３）他地域や世界の人々と仲良くつき合いより良い交流を強めること。

４）他地域や世界の様相を知ることで自分たちの生きる力を得ること。

５）地域資源や生活文化を保全し適正利用しながら，身近な地域の良いところを後世に伝えるとともに，世界に発信すること。

さらに，観光地誌学を学ぶことにより，自分の足で地域を歩き，自分の目で地域を見て，自分の耳で地域の人びとの声を聞いて，観光やツーリズムを介して地域を描き，地域の性格を見出すことができる。

参考文献

岡本伸之編著（2001）:「観光学入門－ポスト・マス・ツーリズムの観光学－」有斐閣アルマ.

菊地俊夫編著（2008）:「観光を学ぶ－楽しむことからはじまる観光学－」二宮書店.

菊地俊夫編著（2018）:「ツーリズムの地理学」二宮書店.

千葉徳爾 (1972, 1973) : 地域構造図について (1), (2), (3), (4). 地理, **17**-10 ; 64-69, **17**-11 ; 71-76, **17**-12 ; 60-64, **18**-1 : 87-92.

Hall, C. M. and Page, S. J. 2006. *The Geography of Tourism and Recreation: Environment, Place and Space*. Routledge.

菊地俊夫 (2015) : 世界地誌学習における比較地誌学習の提案－東南アジアとオセアニアの世界地誌を例として．新地理 **63** : 69-75.